

新編

菅野俊作 編
東敏雄

Facsimile of a page of the manuscript of *Capital*, Vol. II,
edited and copied by Frederick Engels.
(Reduced)

菅野俊作
東敏雄 編

新編
體系經濟學

現代史研究所

新編 体系経済学

1988年4月1日 第2刷発行
1991年4月1日 第4刷発行

編 者 菅 野 俊 作
東 敏 雄

発行者 宮 坂 博 邦
発行所 現 代 史 研 究 所

東京都板橋区南町36-11
〒107 電話 03(3959)3546
振替 東京 4-136324

制 作 現代史研究所出版局

定価 3,000円

はしがき

本書は大学の教養課程を対象として作成した経済学の概論書である。経済学は資本主義社会を主たる研究対象とし、現実にはわれわれが生活する社会構造の物質的な基礎を明らかにすることを目的とした歴史科学である。それゆえ経済学は資本主義一般に共通した運動法則を明らかにする原理論を中心としながら、資本主義の世界史的な発展段階を明らかにする発展史の部分と、その両規定を踏まえたければ現状分析の三部門の統一体として構成されるのである。本書も基本的にはこのような構成に準じている。しかしながら、また本書においては、その教科書としての用途を多様なものとするために、構成について特別な考慮をはらった。

われわれは、本書を編集するにあたって次のように配慮した。第一に、経済学を専攻する学生に対しては専門的研究へ進む準備過程としての役割を果たしうること、第二に、他の専門分野に進む学生および一般読者に対しては現在の社会についての経済学ないしは社会科学の関心を喚起し、その基本的知識を提供するために役立つこと、第三にその利用方法によっては、例えば経済原論、経済政策論、日本経済論、というような専門課程に対する講義素材としても利用できること、以上の三点である。そのため、まず第一篇では、社会の全発展史的な部分は割愛し、資本主義社会に直接先行する封建社会の基本構造とその崩壊過程を、資本主義の生成と関連させながら、簡単に論述するにとどめた。これを前提として、第二章―第四章で、資本制生産の生成と確立の諸過程と政策を明らかにした。続いて第二篇では、学説史に関する詳細は省いて、これを「歴史科学としての経済学の成立」という一章に凝縮し、その上で

資本主義に一貫する原理論部分に、経済原論の講義素材としても自立できるようなスペースを割いた。第三篇は自由主義後の資本主義の国際化するわち帝国主義ないしは国家独占資本主義への変貌過程を明らかにし、その到達点として今日の世界経済の問題点を指摘した。第四篇の日本資本主義発達史論は、以上の世界的な背景のもとに、大きく第二次世界大戦の前後にわけて、その構造的特質と歴史的必然的傾向の把握に留意したつもりである。

もとより、このような編集意図にもかかわらず不十分な点もけっして少なくはない。しかし、この補完は大方の批判をいただいて後日期したいと考えている。ともあれ本書を利用することによって、われわれが本書に期待した三つの役割も十分に果たされるものと信じている。なお、本書は一九七九年に出版した『体系経済学』の改訂版であるが、今回は以上のように篇別構成と執筆者を若干入れ替え、前著以降における世界経済、日本経済の展開を視野に入れ、かつ主として大学の教養課程を意識して改めて編集したものである。前著に比べやや縮約したというものの、対象の大きさのためかなりの頁数になってしまった。利用の段階で工夫していただければ幸いである。なお、本書の出版にあたっては、前書に続いて今回も現代史研究所の宮坂博邦氏にひとかたならぬお世話をいただいた。執筆者一同に代って心よりお礼を申し上げたい。

一九八六年四月

菅野俊作
東敏雄

執筆者（執筆順）

菅野俊作	長野経済短期大学	序章、第一篇第一、四章
渡辺進	尚絅女子短期大学	第一篇第二章
大和田寛	仙台大学	第一篇第三章
蛭原良一	新潟大学経済学部	第二篇第一章
早坂啓造	岩手大学人文社会科学部	第二篇第二、三、四章
奥泉清	岩手大学人文社会科学部	第三篇第一、二章
佐藤恵一	茨城大学人文学部	第三篇第三章
三浦黎明	盛岡短期大学	第四篇第一章
東敏雄	茨城大学人文学部	第四篇第二、三章
鳥谷部仁	新潟大学教養学部	第四篇第四章
山下直登	桃山学院大学	第四篇第五章
斉藤典生	茨城大学人文学部	第四篇第六章
奈倉文二	茨城大学人文学部	第四篇第七章
駒場彰	東北学院大学経済学部	第四篇第八章
渡辺基	岡山大学教養部	第四篇第九章

目次

はしがき

序 章 経済学の対象と方法

..... 12

一 経済学の対象

..... 12

二 経済学の方法

..... 17

第一篇 資本主義の生成と確立

第一章 封建社会の基本構造とその崩壊

..... 24

一 封建社会の基本構造

..... 24

二 封建社会の崩壊

..... 30

第二章 資本主義の生成

..... 33

一 資本の原始的蓄積過程

..... 33

二 資本制生産の生成

..... 38

三 重商主義の経済政策

..... 43

第三章	資本主義の確立と産業革命	50
-----	--------------	----

一	産業革命の実態	50
---	---------	----

二	産業革命の結果とその歴史的意義	61
---	-----------------	----

第四章	産業資本と自由主義	68
-----	-----------	----

一	自由主義の経済政策	68
---	-----------	----

二	近代的信用・金融機構の確立	75
---	---------------	----

三	自由主義の財政	79
---	---------	----

第二篇 資本主義の理論

第一章	歴史科学としての経済学の成立	86
-----	----------------	----

一	経済学の誕生	86
---	--------	----

二	古典派経済学の発展と空想的社会主義	90
---	-------------------	----

三	マルクス経済学の形成	98
---	------------	----

第二章	商品世界（商品、貨幣、資本）	102
-----	----------------	-----

一	商品	104
---	----	-----

二	貨幣	111
---	----	-----

三	資本	116
---	----	-----

第三章 資本主義生産の機構

一 資本の生産過程	119
二 資本の流通過程	132
三 資本の再生産過程	140

第四章 資本主義的生産の総過程

一 競争と利潤	147
二 信用と利子	158
三 株式資本と諸階級	168

第三篇 資本主義世界経済の展開

第一章 世界経済の形成と独占段階の変貌

一 一九世紀における世界経済の成立と発展	176
二 独占段階への移行とポンド体制	182
三 両大戦間の世界経済危機	188

第二章 戦後世界経済の発展と破綻

一 戦後ドル体制と高度成長	195
二 国際経済の拡大	201

三	戦後ドル体制の破綻と経済停滞	208
---	----------------	-----

第三章	IMF体制と世界経済	217
-----	------------	-----

一	IMF成立への過程	217
---	-----------	-----

二	IMFの諸規定とその機能	223
---	--------------	-----

三	ドル危機の深化とIMF体制の動揺	227
---	------------------	-----

四	変動相場制移行後の世界経済と通貨問題	235
---	--------------------	-----

第四篇 日本資本主義の展開過程

第一章	明治維新と資本主義の形成	244
-----	--------------	-----

一	徳川時代と資本主義の萌芽	244
---	--------------	-----

二	明治維新と日本資本主義の形成	250
---	----------------	-----

三	自由民権運動と明治国家の成立	256
---	----------------	-----

第二章	日本資本主義の確立と農村	261
-----	--------------	-----

一	日本の産業革命	261
---	---------	-----

二	日本資本主義と寄生地主制	265
---	--------------	-----

三	農業生産力担当層の交替	271
---	-------------	-----

第三章	独占資本と農業問題、植民地問題	276
一	日露戦後経営と独占資本の形成	276
二	第一次大戦と諸産業、植民地支配の新局面	281
三	独占資本の制覇	287
第四章	現代資本主義と農業問題	292
一	昭和恐慌と独占資本	292
二	農業恐慌と救済的農政	297
三	戦時経済と独占資本の変貌	302
第五章	財閥解体と再編成	306
一	戦争の被害と敗戦後の日本経済	306
二	戦後改革と財閥解体	310
三	独占資本の復活と再編成	317
第六章	農地改革と日本農業	323
一	農地改革案の形成過程	323
二	農地改革の実施とその諸結果	328
三	改革後の日本農業	334
第七章	高度成長期以降の産業構造と企業集団	337

一	日本經濟の高度成長……………	337
二	産業構造の高度化とその特徴……………	343
三	企業集團の展開と構造……………	347
四	石油危機以降の日本經濟と産業構造……………	352
第八章	資本自由化と貿易摩擦……………	359
一	輸出競争力の強化と資本自由化……………	359
二	綜合商社の役割と多国籍化……………	365
三	世界經濟の不均衡と貿易摩擦……………	371
第九章	現段階の食糧・農業問題……………	377
一	高度經濟成長と日本農業の変貌……………	377
二	八〇年代農業・農政の方向……………	388
三	現段階の食糧・農業問題……………	396

〔卷 末〕

参 考 文 献

序章 経済学の対象と方法

序章 経済学の対象と方法

一 経済学の対象

経済活動 「人の生くるはパンのみにあらず」。まことにそうである。人間が生きてゆくには崇高な宗教、高い芸術や文化などの精神活動が必要なことはいうまでもない。しかし、いま、「パン（物財・財貨）がなければ、人間は生存できるか」と反問されれば、それは不可能だと答えるほかあるまい。人間はそれ自体一箇の生物であり、物質的な存在であるから、まず外界からの物財の継続的な摂取と排除を生存の不可欠の条件としているのである。しかし、この物財、たとえば日常生活に必要な衣、食、住などはもちろん、精神活動の対象となるものも、すべて自然界との交流によってえられるものである。ところが、自然現象である光、熱、水などや人類のごく古い採取経済時代の物財は別として、現在はいこうした物財が自然界のなかに、人間がそのまま利用できるような形で存在することはむしろごく稀で、その多くは自然の存在物に、人間が物理的、化学的变化を加えることによって、はじめて利用できる状態となっているのである。

人間が自然的な存在物に何等かの方法と手段で労働を加えることによって、物理的、化学的变化を与え、それを利用できる状態にすることを生産とよぶ。自・他あるいは物・心を問わず、この生産がなければ、人間の生存は一瞬で

も継続できないのである。しかし、ここでは生産それ自体が目的ではない。最終的な目的は生産物を欲望に応じて利用することであるが、これが財貨の消費である。したがって人間は、消費を前提として継続的に生産するのであるが、この逆に、継続的な消費もまた生産を前提として可能となるのである。このように、生産と消費は相互に制約し合いながら、またそれぞれ一方を前提条件としているわけである。もちろん、生産と消費が直結しているわけではない。その間には生産物の分配や交換・流通という行為が介在するのであって、こうした行為を媒介にしてはじめて生産も消費も可能となる。それらは一連の運動過程の一環節である。そして、こうした行為の総体が経済活動である。

個人の経済行為は、一見他人と独立して行なわれ、完結しているようにみえる。しかし、実は他人の経済活動と深く関係し合っているところの、社会的な活動総体の一部にすぎないのである。人間自体が最初から社会的存在であるからであるが、とりわけ社会的分業が発達している現代では、生産者と消費者とは相互に前提しあいながら、しかもそれぞれがまたいわば全国的、さらには全世界的な社会の範囲にわたって相互に関係し合いつつ、経済活動を営んでいるのである。しかも、この社会的な関係は無秩序なものでなく、一定の秩序と法則性をもっている。後でもう一度のべるが、経済学はまず、こうした経済活動を対象として、人間の意識から独立した、その客観的な法則性を明らかにするものである。したがって、物質の構造や運動またはその生産や消費それ自体を研究の対象としている自然科学とは異なり、経済学は経済活動を媒介としてとり結ぶ人間の社会的な関係の法則を明らかにするものである。いいかえれば、人間の社会的関係を、経済活動の側面を通して研究するのである。小麦がロシアの農奴、フランスの小農、アメリカの農業労働者、わが国の自作農などのいずれかによって生産されようと、小麦は小麦であることにかわりはないが、それぞれの生産や消費における人間の社会的な諸関係は明らかに異なっている。自然科学は小麦やその生産自体を、経済学はそれを媒体とした人間の社会関係を研究の対象としているのである。

生産力 財貨の生産は、人間の労働力、労働対象、労働用具の三つの要素を不可欠の前提条件とする。これらは、分離された存在としては、それ自体はなんら現実的な機能をはたすものではない。それらは生産過程に有機的に結合、統一されることによって、はじめて現実の生産力として機能する。まず、人間の労働は、動物の本能とは異なり、最初から目的をもった物・心両面の活動の総体であって、この活動過程で人間は自然素材の形をかえ、欲望をみだす消費に適したものにす。そしてまたその反面、生産の反覆や経験などによって自らの天性をも変化させる。人間の労働力は生産の主體的な条件である。

労働が加えられる客観的条件が労働対象である。この労働対象は採取経済の段階では、土地、草、木、石、魚、獣などのように、自然素材それ自体であるが、農・工業が発達すれば、労働対象の大部分は過去の労働の生産物となる。すなわち、過去の労働の生産物をもって、新たな生産の出発点とするわけである。農業の既耕地や種子、紡績工場の綿花や織物工場の紡糸がこれで、原(材)料とよばれる。

人間の労働と対象とを媒介するのが労働手段である。建物や道路もこれに含まれるが、最も重要な労働手段は労働の用具である。それは、自然のままの石や棒あるいは、人間が生産した最も簡単な石器、土器や道具類から、今日の複雑な機械やコンピューターにいたるまで発展してきたが、これによって労働の生産性もまた飛躍的に発展してきた。人間は他の動物と異なり、道具を作りまた発展させることのできる唯一の動物なのである。労働用具の発達水準は生産性の発展をはかる尺度である。経済上の時代区分を決定する基準は、何を生産したかということではなくて、何をもって生産したかということにある。労働の対象と用具とを一括して生産手段というが、これと労働力とが労働過程に有機的に結合されることによって、はじめて目的にそった生産力として機能するわけである。

こうして、人間は生存に必要な生産と消費によって、自身の再生産を行なってきたわけだが、それは生産手段の